エレン・ブラウン氏との対話 ―――― 大地 舜（国際ジャーナリスト・翻訳家）

お金の仕組みの摩訶不思議 第2回

米国は国際金融業の植民地になっている

現在、世界を支配している「お金の仕組み」は欧米から始まっている。米国でベストセラーとなった『負債の網』（那須里山舎刊）の著者エレン・ブラウン氏にお金の仕組みの摩訶不思議を問うシリーズ第二回は、この「お金の仕組み」が、どのように米国を支配するようになったかについて聞いてみた。

◇

米国を植民地化している国際金融カルテル

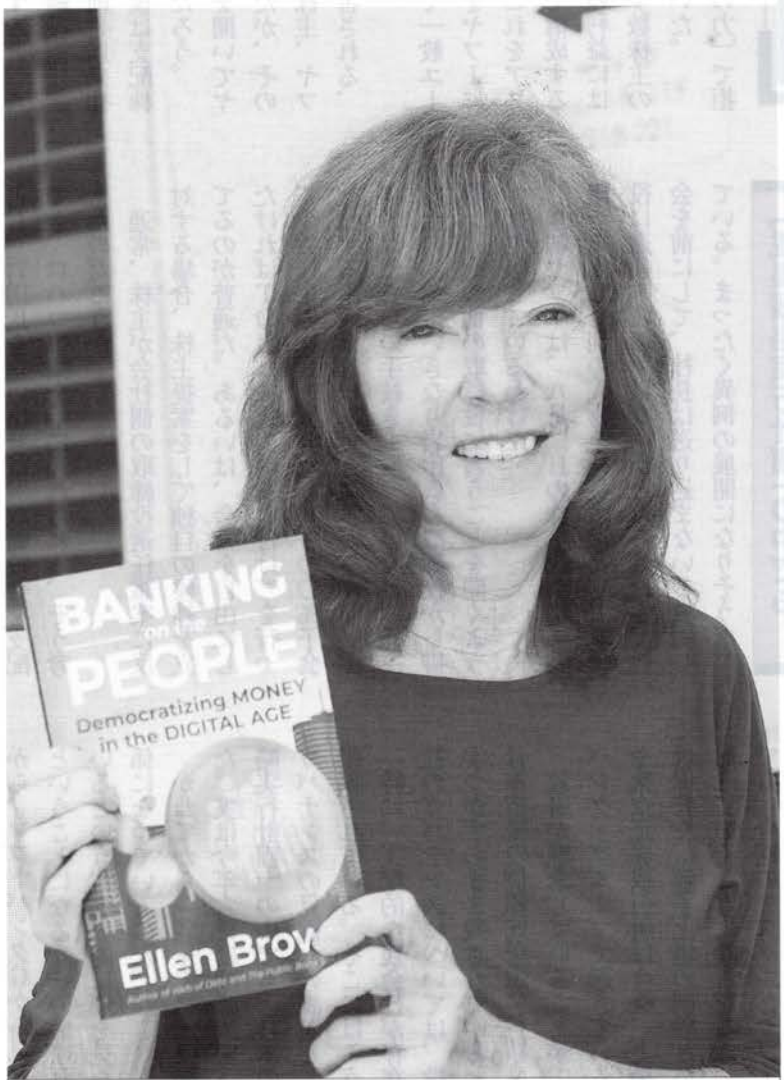
――一九三〇年代の大恐慌の後にフランクリン・ルーズベルト大統領が活用した「復興金融公社」は、世界大恐慌で荒廃した米国経済の立て直しに大成功したとのことですが、現在は存在しませんね。

ブラウン氏 一九五七年、アイゼンハワー大統領の時代に廃止されました。

――なぜでしょう？

ブラウン氏 あまりに成功して利益が出たので、民間銀行の仕事を奪っているとされたのです。そこで解体され、民間銀行にすべてが任されることになりました。

――ルーズベルト大統領は一九三三年に「アンドリュー・ジャクソンの時代以降、米国政府を支配するのは金融業



Ellen Brown　米国ロサンゼルス出身の作家、司法弁護士、社会活動家。公共銀行制度研究所の創始者であり会長（http://www.publicbankinginstitute.org/）。『Web of Debt』（『負債の網』那須里山舎刊）は米国でベストセラーとなり、『Public Bank Solution』（本邦未訳）では、公共銀行の必要性を説いている。最新刊は『Banking on the People』（本邦未訳）で、2019年6月1日に米国で出版された。ブログはEllenBrown.comで読むことができる。民主的な経済を研究する「The Democracy Collaborative」のフェローでもある。

者です」と友人宛ての手紙に書いています。結局、米国では大統領よりも金融カルテル（独占企業連合）のほうが権力を持っているのですね。

ブラウン氏　その通りです。第七代大統領のアンドリュー・ジャクソンは、一八三四年に国際金融業に支配されていた米国の中央銀行を解体しました。それ以降、米国の通貨を発行するのは、政府にするべきか、民間銀行にするべきか、という論争が始まっています。この闘争は二百年にわたり行われていますが、一九一三年に米国に連邦準備制度理事会（FRB）が設立され、最終的には国際金融カルテルの勝利で終わっています。

――米国は大英帝国との独立戦争では勝利を収めていますが、国際的な金融業との戦いでは負けたということになりますね。

ブラウン氏　そうですね、国際金融カルテルは、今では、豊かな超大国・アメリカ合衆国を植民地にしています。

――どのように、米国を制圧したのでしょう？

ブラウン氏　米国の独立戦争の時、戦費がなかった植民地の政府は「コンチネンタル」という紙幣を発行しました。これは借用証書で、いつか銀貨や金貨に換えますよ、という約束です。英国は「コンチネンタル」の偽札を大量に刷って、米国に持ち込み、紙幣の価値を下げました。

――それは犯罪行為ですね。

ブラウン氏　「コンチネンタル」はそれでも通貨として流通を続けたので、今度は米国の金融業者たちが悪い風評を流して、安い価格で、「コンチネンタル」を買い始めました。何も知らない大衆は、不安を覚えて「コンチネンタル」を売り始め、価値が暴落して、紙切れ同然になりました。

――それでは米国の金融業者たちは大損をしましたね？

ブラウン氏　金融カルテルの人々は、賢いですから、損になることはしません。もちろん戦略がありました。独立後の米国の金融制度は破綻しており、中央銀行が必要だったのです。その後、米国で初めての中央銀行である第一米国銀行が設立されましたが、この時に「コンチネンタル」は元の価値で、第一米国銀行が引き取っています。つまり金融業者たちは、大儲けしています。

――第一米国銀行ができたのはいつ頃でしょう？

ブラウン氏　一七九一年ですが。一八一一年に第三代大統領トーマス・ジェファーソンの時に廃止されています。ジェファーソンは、この銀行がヨーロッパの金融業者たちに支配されていると疑ったのです。第一米国銀行が解散されて分かったことは、この銀行の株主の七二％が、英国人とオランダ人だったことです。

米国の南北戦争も欧州金融業者のたくらみ

――その後、第二米国銀行が設立されましたが、やはり国際金融業者に支配されていたので、アンドリュー・ジャクソン大統領が解体したわけですね。この時に「銀行カルテルは人々の血肉を食らうモンスターだ」と主張したそうですね。

ブラウン氏　そうです。この銀行も第一米国銀行と同じように八〇％が民有で、政府の所有は二〇％でした。でも政府が負担した二〇％は民間銀行から借金して拠出していました。

――政府にはお金がなかったわけですね？

ブラウン氏　銀行家たちも、お金を持っていたわけではありません。ただ、金をたくさん持っていると、錯覚されていただけです。当時は預かった金の十倍を貸し出しても大丈夫という、部分準備制度（フラクショナル・リザーブ）というお金の仕組みは、現代よりも理解されていませんでしたから……。

――ところで、アンドリュー・ジャクソンはアメリカ原住民の虐殺でも有名ですね。北アメリカに移住したヨーロッパのプロテスタントたちは、アメリカ原住民の絶滅を図ったといわれています。キリスト教に改宗させることができないのがその理由でしたが、豊かな北アメリカ大陸の土地が欲しかったそうです。

ブラウン氏　その話は、大地さんのほうが詳しそうですね。

――『American Holocaust（アメリカ人大虐殺）』（本邦未訳）という本を読んだのですが、カソリック教徒のスペイン人やポルトガル人は、南アメリカ大陸を侵略して、金銀を求めましたが、それにはヨーロッパの金融業者が関係していたそうです。南米に遠征隊を送り込んだスペインやポルトガルの王家は、借金で苦しんでおり、スペイン、ポルトガルに流れ込んだ金銀は、オランダなどの金融業者に流れていったそうです。

ブラウン氏　十七世紀以降、ヨーロッパの王家は、銀行家から借金をしていました。特に戦争をすると資金が必要

になります。当時の銀行家たちは、戦争を煽って、国家に資金を提供して儲けていました。本来、王家は自力で通貨を発行すればよかったのですが、銀行家たちの「お金の仕組み」に気づかずに、借金をしてしまいました。

――お書きになった『負債の網』には、米国の南北戦争も、ヨーロッパの金融業者たちが、最初からたくらんでいたと書かれていますね。

ブラウン氏　十九世紀の有名なドイツの首相ビスマルクによると、ヨーロッパ金融の支配者たちは、南北戦争が始まるはるか前に、米国を二つに分断しようと決めていたそうです。

――確かな話ですか？

ブラウン氏　『マネーを生み出す怪物』（草思社刊）の著者エド・グリフィンは、この引用は正確だと言っています。確かなのは、南部連合に最初に資金提供をしたのが、米国の銀行家J・P・モルガンとつながる英国の金融家たちだったことです。

――南部連合と戦ったリンカーン大統領は、南北戦争の戦費が必要で、銀行家たちから借金をしようとしましたね。しかし、年利が二五％とか三〇％といわれて、借金を諦めましたね。

ブラウン氏　そうです。その代わりにリンカーン政府は自力で四億ドルの紙幣を発行しています。これは、政府が保証しているだけの紙幣ですが、金銀と同じように通貨として扱われました。緑色をしていたので、いまでもグリーンバックダラーとして、米国の紙幣にその伝統が受け継がれています。

通貨量を自在に操り お金儲けができる

――ただの紙切れを、金銀と同じような通貨にすることができるのですか。信用の元になっているのは何でしょう？

ブラウン氏　人間の労働力です。この紙幣は兵士や公務員の給与の支払いや、戦時物資の購入のために使われています。十三世紀から十七世紀のヨーロッパでは「タリー」という決済システムが使われていましたが、これに近いシステムで、人々の労働や物品の領収書にすぎません。

――それが通貨になるのですか？

ブラウン氏　政府と国民の間に信頼関係があれば、通貨としての役割を果たせます。

――政府が、金銀の裏付けもなく刷った紙幣が信用されたわけですね。もっとも現代の私たちは、通帳に書かれた数字を信用してお金が銀行にあるのだと思っていますけれど……。

ブラウン氏　この他にもリンカーン政府は国債なども発行しています。それを民間銀行が購入して、部分準備制度というお金の仕組みを使って、十倍の紙幣を刷って、世の中に出したので、通貨の供給量が足りました。

――リンカーンが銀行家たちから借金していたら、大変なことになっていましたね。

ブラウン氏　一九七二年に米財務省が、米国議会の要請を受けて、リンカーンが銀行から四億ドルの融資を受けていたら、利子の支払いがいくらになったかを計算しています。利子だけで四十億ドルの支払いです。

――リンカーン政府が、紙幣を大量に印刷してもインフレにはならなかったのですか？

ブラウン氏　戦争にはインフレが必ず伴います。政府が印刷したお金が原因ではありません。

――リンカーンが暗殺されて、事態が変わったわけですね？

ブラウン氏　そうです。国家が発行する紙幣が回収され、民間銀行が発行する紙幣が再び力を得て、流通することになりました。

――民間銀行の紙幣が支配的になると、何か問題がありますか？

ブラウン氏　彼らが団結すれば、景気をよくすることも、不景気にすることも、自在にできます。その後、二百年の間、米国の民間銀行カルテルは意識的に大衆の財産を奪ってきました。

――景気循環は自然に起こる経済現象ではないのですか？　私たちはそう教わってきましたけれど……。

ブラウン氏　銀行カルテルが存在すると、彼らが街に出回るお金の量を自在に操って、お金儲けができます。まず金利を安くして、お金を借りやすくします。景気が過熱してきたら、突然、一致団結して融資していたお金の返済を求めます。街に出回るお金の量を少なくするわけです。そうすると倒産する農家や企業が続出して、銀行は格安価格で農場や工場などを手に入れるこ

とができます。

――そのようなことは、銀行を厚く信頼している日本人には信じがたいところです。

ブラウン氏　金細工師が銀行家になり、金本位制が採用されてから、金を持つ金持ちたちが、街に出回るお金の量をコントロールし、庶民の富の収奪をしています。金本位制は少数の金持ちが世界を支配する金融制度です。

――金本位制は採用されない世界になりましたが、貧富の格差は相変わらず広がる一方ですね。

ブラウン氏　米国の場合、国家が通貨発行権を持っていないことが、格差の拡大をもたらす最大の原因です。国際金融業者が支配する連邦準備制度理事会（FRB）から通貨の発行権を国家が取り戻す必要があります。

――米国では景気が良いとのことですが、ハリウッドの繁華街の脇道にはかなりの数のホームレスが寝ているので驚きました。

ブラウン氏　米国の庶民の実質賃金は上がっていません。お金の創造の九五%は民間銀行が行っていると言いましたが、現在、融資されたお金の使い道の八五%が金融関連です。工場などの生産事業に融資されている金額は一五%にすぎません。これは危険な徴候ですが、連邦準備制度理事会は何もしません。

世界には二つの「お金の仕組み」がある

――一九三〇年代に世界大恐慌を起こして大不況を長引かせた責任も、連邦準備制度理事会にあるという声は強いですね。

ブラウン氏　日本で起こった一九八〇年代後半のバブルと、その後の不況は、一九二〇年代の米国のバブルと、その後の大恐慌によく似ていますね。『Princes of the Yen』（『円の支配者　誰が日本経済を崩壊させたのか』二〇〇一年、草思社刊）を読みましたか？リチャード・ヴェルナーというドイツの経済学者が書いています。

――読んでいません。

ブラウン氏　ヴェルナーによると、日本のバブルは日本銀行が計画的に起こしたそうです。当時、日本銀行は大蔵省の支配下にありましたが、大蔵省を出し抜いて、バブルを起こし、計画的にその後の不況も演出した、と報告しています。

――国際的な金融カルテルからの指令ですかね？　それとも米国の圧力とか？

ブラウン氏　結果的に見ると、不況が長引いた責任をとらされ、大蔵省は解体され、財務省と金融庁に分かれ、一方、日本銀行の独立性が法的に保証されました。その意味では国際的な金融カルテルが推し進める路線に一致しています。

――米国の構造改革の要求に、日本が応えたのでは？

ブラウン氏　ヴェルナーによると、「円の支配者」たちは、米国の構造改革の要求を受け入れるのは日本の利益になると、考える人々であったそうです。

――帰国したら読んでみます。

ブラウン氏　ジョン・パーキンス（元国際コンサルタント会社チーフエコノミスト・作家）の『Confession of an Economic Hit Man』（『エコノミック・ヒットマン　途上国を食い物にするアメリカ』二〇〇七年、東洋経済新報社刊）は読みましたか？

――読んでいます。インドネシアなどにばら色の開発援助を奨めて、実はそれは欧米による富の略奪のためだった、という本ですね。この告白には衝撃を受けました。今も、世界は強欲な帝国主義が支配しているのだと感じました。

ブラウン氏　この本も発展途上国を、どのように負債の網にからめとるか、そのやり方を明らかにしています。

――世界には二つの「お金の仕組み」があるわけですね。一つは国が通貨を発行する方法。この方法だと負債は発生しません。もう一つは、国家に支配されていない中央銀行が通貨を発行する方法。この方法だと、政府は国債を発行して民間銀行が購入するので、政府は負債を負い、利子を払うことになります。

ブラウン氏　現在では第二の方法が世界で主流となっています。リンカーン大統領は第一の仕組みで成功しましたが暗殺されました。これからも第二の仕組みに抵抗すると、叩かれることになります。

――第二の仕組みの覇者である米国は、世界最大の軍事力を持っています。イランや中国は、これからも目の敵にされそうですね。中国は、明らかに第一の方法を採用していますから……。

ブラウン氏　米国がイランを敵視するのは、原子力問題よりもお金の問題が大きいと思います。世界第六位の石油産出国イランは、原油をドルではなくユーロで売っています。これは米国の世界経済支配に対する挑戦です。

（以下、次号に続く）